

【北海道妹背牛町】

(1) 自治体概要

北海道の中央西部に位置し、総面積 48.64 k m²と道内でも3番目に狭小な、山のない町である。米作を中心とした農業を基幹産業とし、鋳造製品、袋製品などの製造業、小売業により地域経済が支えられている。

人口:2,807人 総世帯数 1,393世帯 高齢化率 48.1% (令和3年4月1日現在)

(2) 重層的支援体制整備事業に取り組んだ背景・課題や取組の理念

本町は、平成25年に社会福祉協議会の「地域福祉実践計画」策定を住民主体で進めている中で、街中の農協店舗が閉鎖し、跡地に住民の声により「子どもから高齢者までが集える、活動できる場」として、住民主体で手づくりの「わかち愛もせうしひろば」が開設された。同時に「住民主体で地域づくり」をスローガンとしたNPO法人も立ち上がり、拠点づくりが少しずつ進む中で、町は地域における包括的支援体制を社会福祉協議会やNPO法人と連携し、住民が自分たちで課題を解決できる相談窓口「まちかどステーション」も社協で開設され、相談支援員「まちかどアドバイザー」の育成にも取り組んできた。

本町においては、保健センター内に健康福祉課(福祉グループ・健康グループ)を配置し、地域包括支援センターも開設されており、子ども・子育て、障がい、高齢者も含め、さらには生活保護等において、すべての住民を対象に対応できる相談支援体制が確立されているため、総合相談窓口(ワンストップ窓口)として、ある程度は機能しているが、個々の相談においてはそれぞれの部署で対応しており、その中での複合的な課題も見え隠れしている相談ケースも年々増えてきており、世帯での課題整理、アセスメントの必要性を認識していた中で、地域住民に身近な窓口が多機関協働の機能を持たせられないかと考え、社協の「まちかどステーション」も活用し、地域住民も巻き込んだ地域全体における支援関係機関の連携による、いわゆる多機関協働の伴走支援体制を構築するためのネットワークの軽い専門職の配置もあわせて、この重層的支援体制整備事業を展開したいと考えたわけである。

「助けて」「助けるよ」と言える身近な関係を地域に構築し、地域住民自らが地域課題を発見し、その解決に向けて自分たちにも何かできることがないかを模索し、実践をつみ重ねることが、5年後10年後の「地域に保険をかけるという地域づくり」を進めてきた中で、この事業によりさらなる地域づくりを展開したいと考えている。

(3) 主要な取組状況

ア 「相談支援」に関する体制・取組の内容

既述のとおり、本町においては役場の保健センターに各分野の相談窓口が設置されているため、現行の相談支援体制を基本としつつ、役場内部の「包括的相談支援体制」の機能の強化を図り、行政や多機関とのパイプ役として社会福祉協議会に「包括化推進員」いわゆるコミュニティソーシャルワーカー(社会福祉士)を配置し、現在、社会福祉協議会で育成している「まちかどアドバイザー」や地域の民間相談事業所等の多機関とも連携し、相談を受けとめ支援につなげられるようアセスメント、プラン作成していく役割等を「多機関協働事業」として社会福祉協議会に委託し、その役割を担っていただいている。同時に、「アウトリーチ等継続支援事業」も社会福祉協議会に委託し、ひきこもりで支援を求められない、支援につながることを拒否する人の発見を社会福祉協議会の「ふれあい訪問」や「まちかどアドバイザー」等による情報提供、民生児童委員協議会の「地域支え合いマップ」の活用、生活支援体制整備における「協議体」の構成委員である関係機関や地域ケア会議等の各種会議における情報収集を展開している。

イ 「参加支援」に関する取組の内容

本町においても、最近話題となっている80・50世帯において、精神的障がいを持たれたひきこもりの子がいたり、障がい福祉サービス作業所等の利用対象にならないが一般事業所になじめない等、精神的に不調があり社会に出ることに不安があるというようなケースは小さ

い町ではあるが潜在しており、さらには最近ではコロナ禍のなかで今まで特に問題がなかった児童生徒の不登校がある中で、社協の事業に体験参加できるプログラムや就労支援の検討も視野に入れたなかで社協にこの事業を委託しており、さらには不登校の居場所づくりや学習支援を児童発達支援等の事業所に委託して、この事業を展開している。

ウ 「地域づくり支援」に関する取組内容

本町においては、平成26年9月に「住民主体でまちづくり」をスローガンとして設立された NPO 法人「わかち愛もせうし」が地域づくりに参画し、旧 JA 店舗跡地に開設された「わかち愛もせうしひろば」を拠点として、社会福祉協議会も連携し住民主体のさまざまな活動が展開されている。地域住民の先導者として活動する中で、多くの賛同者が増えて地域のつながりが広がり、その中で「交流」、「参加」、「学び」の場が生まれるよう期待している。この「わかち愛もせうしひろば」は、もともと子どもから高齢者まで世代や属性を超えて交流できる場としての機能を持ち合わせているため、本町においては今後もこの場を拠点として活用し、また、ここには既述の「まちかどステーション」も設置されているため、多様な地域づくりの担い手の確保に向け、この事業の考え方にある「人と人」、「人と場所」、「人と資源」をつなぎ、生活支援コーディネーターやまちかどアドバイザーとも連携し、顔の見える関係性が地域で生まれるよう事業の展開を考えている。

本町においては、この「重層的支援体制整備事業」は、今まで本町で取り組んできた事業、施策を、それぞれの分野における所管、関係機関の横のつながりをいかに強化していくかを行政や社協、住民が自分たちの将来の地域像を明確にしていくものととらえ、「地域づくり」、「担い手育成」において、有効な事業となるよう展開していく必要性を認識している。

